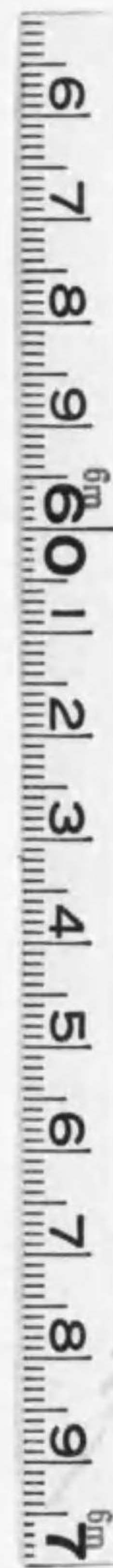
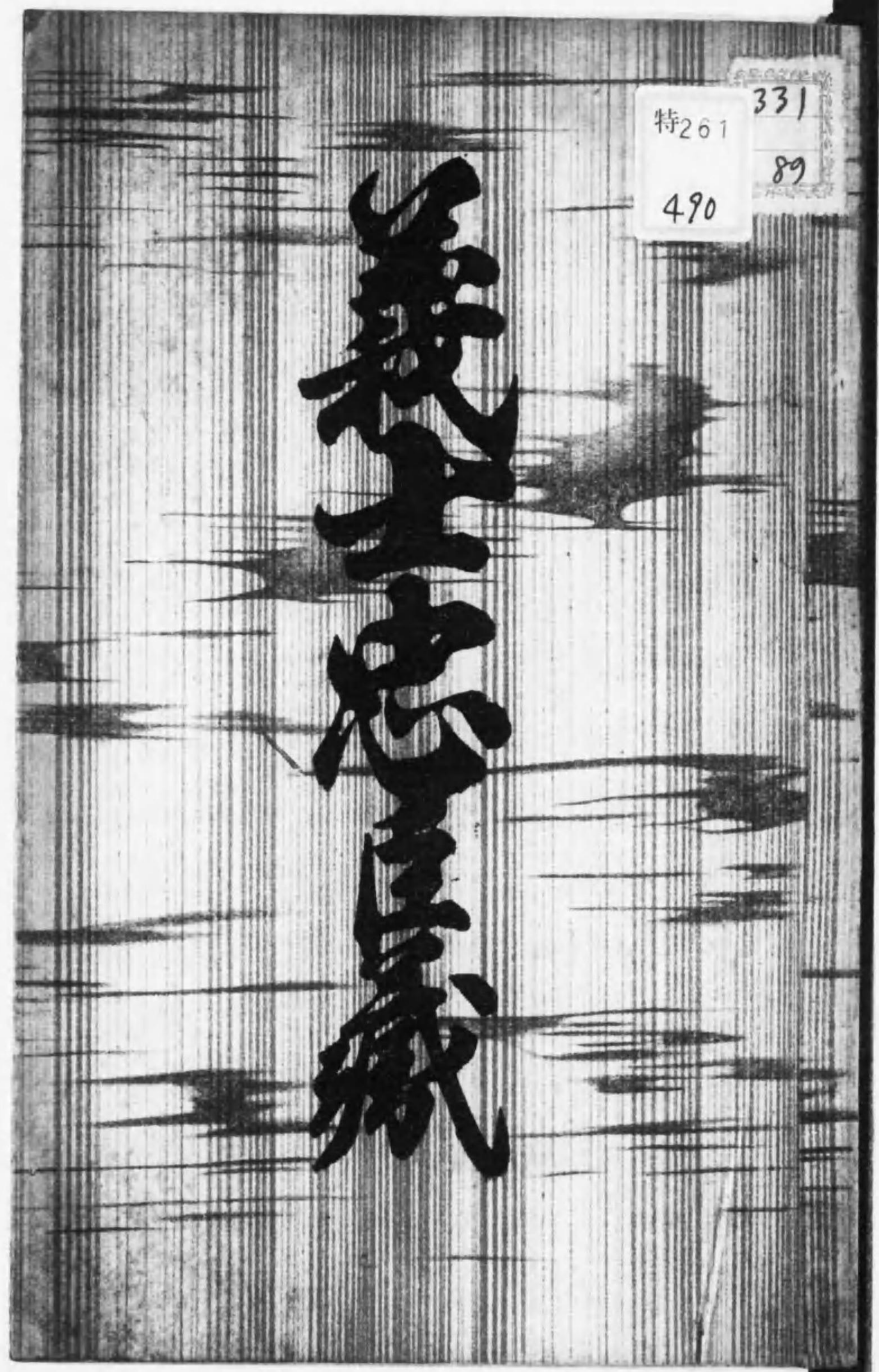


始



特261 331
490 89

魏氏文選



特261
490



義士忠臣藏



義士忠臣藏

目次

本藏下屋敷の段	一
用 註釋	三
本藏下屋敷の段筋書	一

解附説古本 義太夫名曲全集

義士忠臣藏

本藏下屋敷の段

人知ぬ思ひこそのみ侘しけれ、我歎をば我身ぞ知る、三世の縁も淺草の片原町にしつらひし、加古川本藏が下屋敷へ主人桃の井若狭之助、忍びと見へて案内に連直に乗物裏門より、座敷

へ昇込む其饗應或は美盡し善つくし、あらん限りの饗應なり。
御用透にや近習井浪番左衛門家來引連れ傍りを見廻し、

「コリヤ、家來共主人桃の井若狭之助様の妹姫三千歳殿、先達て此本藏が屋敷へ差越れ病氣保養とは表向誠は言號の縫之助殿と遠ざけん爲お預けなされし所今日お迎の役目此番左衛門に仰付られ又殿様是へ御成なされたは、諂ひ武士の本藏を御成敗なされふとの事だ。我豫て三千歳姫に心をかくる所本藏めが彼是妨なす、何に付ても邪魔なやつめ、今日御成敗相濟だ上、三千歳姫は身が御供申し屋敷へ連歸れと有御上意、何と時節は待ねば成らぬ者だ、大願成就するは今日今夜、

併豫て手剛き本藏なれば、必ず油斷致すな、若手に餘らば、コリヤ斯々」と耳に口。

「成程心得ました。スリヤお姫様の乗物は」

「オ、サ花川戸より御慰みと偽り、小船を出し、向島から野道を横に某が屋敷まで、首尾よふ行ば、コリヤ褒美は望次第」

「そんなら井浪様」

「必ずぬかるな」

「心得ました」

「コリヤ、シイ密にく」

としめし合して下部共、小庭へ廻れば番左衛門臺子の釜の

前様には今宵屋しきへ連歸れと則此番左衛門御迎ひの役目
でござりますす』

「ム、何と云やる兄上様が自に今宵屋敷へ歸れとかや』

「イヤモ歸る共く、肝玉がでんぐり返る俄の御婚禮何とお
嬉しうござりませふがな』

「ヤア、そんならアノ縫之助様と祝言かや』

「ア、イヤ拙者と祝言さそふと有る殿の御上意』

「エ、』

「是はしたり、お逃なさるなく、マア、くお下にござれ、く姫
君様去逆は難面と申す物、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、お前様が戀かかれて

ござる縫之助殿は鹽冶判官の弟なれば上への恐御縁組は何
として、く、ならぬ戀路にこがれふより男に持て何不足のな
い此番左衛門又お前様がお力になさる、本藏めは今日殿様
御直の御成敗何と御合點が参りましたか、コレサ、く、三千歳
様何も其様にすぎなふ遊ばす物ではござらぬ兼好法師は何
と申た、サ、ハ、ハ、御存じなくば此番左衛門、ツイちよこくと
御傳授致す』と、取付く手先をふり放し、
「主に對して慮外の戯不禮で有ふぞ穢らはしいさがりやさ
がりや』

オット下つて裾から手を入側ぬつと本藏が出る共知ぬ戀

主人へ捧るが臣の習ひ、御直の成敗少しもいとはん、イヤモズ
んど恐れ申さぬ』

と行國が詞に井浪番左衛門しよげり入てぞ閉口す。折か
ら下部が罷出で、

『御家老本藏様を御成敗と有て、急ぎ本藏に繩打て奥庭へ引
き、太刀取は井浪番左衛門に申付るとの御詫でござる』

と、聞よりはつと驚く加古川井浪は得手に本藏が大小もぎ
取、早繩打、

『アア本藏モウ叶はぬ御成敗だ、太刀取は此番左衛門、ハ
レヤレ氣の毒千萬、ハ、ハ、ハ、ハ、何もあわてる事はないぞ、ど

うだふるひが出たか、オ、尤だ、わりや最前何と言た、一命
は主人へ捧るが臣の習ひと言たぞよ、イヤナぬかしたぞよ、ナ
逆も叶はぬ事と觀念して、早く立て、きり、立をらふ』

と、どふと蹶飛し引張れば、手先しまりて喰入る繩目には泣
ねど心には、是が忠義の仕納めかと思へば足もたどくと、主
人の賢慮計り兼、奥庭へこそ行水の上へ流るゝ例しなく、憂事
積る行國が消る間を待つ庭の面、我を仕置の芭蕉葉の廣さも
今は恨めしく、人は夫共白洲なる、御前へこそは引れくる。斯
としらせに若狭之助、褥の上に座を設け、

『イヤナニ本藏、今日の成敗餘の儀に有らず、其方家柄と申し、

勤功にめで先祖より家老職を勤めさせ知行五百石を當行ふ、然るに某近曾鎌倉殿中にて師直を只一刀に切捨んと存ぜし所きやつ低頭平身イヤモ存外の詫言コハ心得ずと思ひしが、汝師直が屋敷へ拔出で不相應なる金銀を以て媚語ひし故師直は討洩したり然る所諸大名の取沙汰にも若狭之助は語ひ武士卑怯者と殿中一ばいの取沙汰と聞其上汝へ遺恨の次第申聞せし砌予が目通で松の一枝切取眞此通りと金打致したでないかそちや某をたばかつたな』

「ハ、恐れながら我君へ申上る其不可を知て諫めざるは不忠の第一諫れば以て背くに似たり松が枝の金打何故表裏に

仕るべき君御短慮の木の扁を切て退れば公の一字に恙なく、國家長久祈り奉る』

「ム、スリヤ松の木扁を切取しは國家の爲此若狭之助へ諫言の謎とな』

「ハ、御賢慮いかゞでござりませふ』

「ム、然らば請し恥辱はいかに』

「ハ、ア、コハ存じ寄ざる御仰君恥かしめらるゝ時は臣死と申す』

「だまれ本藏左云汝が何故になぜ切腹は仕らぬ命を惜みのめくと蟄居致せしは何事夫でも武士かイヤナ家老といふ

か既に番左衛門申すには、本藏を急度御成敗なさらねば、御家の
の瑕瑾に相成ると、某へ數度の諫言、ぜひに及ばず只今死罪に
行ふ、但し違存ばし有るか』

「ハア、恐れ入たる御仰不忠不義の本藏、イヤモ何しに違存
申上ん、只御憐愍の御仕置、有難く御請申し奉る』

「オ、よき覺悟、しかし予を恨むて有ふな』

「コハ勿體なき御詞、下主下郎のなすべき太刀取番左衛門に
仰付られ、死後の面目、ハア、有難ふ存じ奉る、去ながら、只一言
申上げ度は臺子の釜』と云を打消し番左衛門、

「ヤイ、本藏、今に成て一言も二言もないはい、じたい

うぬ殿様の御遺恨有る師直を討もらし、其上陪臣者のうせる
場所でもない大廣間へ出をつて、判官公を抱留、一ツとしてろ
くな事をさらさぬやつだ、其様な馬鹿者を生置ては、後日の妨
げだはい。サア御前や、時移らば御歸還の妨、イデ成敗』

と裾引上げ、既に討んと立寄る井浪、
「番左衛門まで待てと云ば先待て、イヤサせく事は無い、すべ
て大罪人は長く生置苦しめるも仕置の一ツ、いかにしても憎
い本藏、餘人に討すも残念、身が打捨てん、其刀是へ持て』と、優
美の顔色、しづく庭へおり立て、

「ム、覺悟の體はまだしも出かした、ノウ、番左衛門』

「ア、イヤ〜左様ではござるまい、今斯なつてしよ事がなさ
の覺悟と見へます、へ、へ、へ、へ、コリヤ〜本藏〜、殿を卑怯
者にしなし、大忠臣の某を人非人だイヤ、又不義者なご、ぬか
した、其天罰で今此さま、ム、ム、ム、ム、ハ、ハ、ハ、ハ、」と嘲弄な
じる其内に、刀ひらりと若狹之助、

「今こそ最期觀念」と、振上る手を振返し、ずはと切たる井浪
が首、水もたまらず打落せば、本藏驚き、

「コリヤ番左衛門を御手討」

「アイヤ、其方逆も同罪」と、繩目をすつばと切はらひ、しづし
づ座に着詞を正し若狹之助、

「本藏〜近ふ參れ、其方が科、今日只今相濟だ、長の暇くれる」
「スリヤ一命をお助け下され、長のお暇とな、ハ、有難う存じ
奉る」

「ハ、ハ、ハ、ハ、嬉しいか、嬉しいは道理〜、コリヤ本藏妻子
を都へ登し、由良之助に對面なし、討れて死たい心で有ふがな、
イヤナ隠すに及ばぬ、判官を拘留たはそちが誤り、一命捨ねば
娘が縁組は扱置、判官が位牌へナ言譯立つまい、此若狹之助が
爲には身代り同然の判官、我命斗りか先祖へ對し、忠臣義心と
は汝が事諂ふても苦しくないぞ、ナニ諂ひ武士は世間にく
らも有はい、判官が今の有さま、後車の戒しめと、ふつ、り短慮

と、まつたもそちが影嬉しいぞよ、過分なぞよ、箇程の家來に
暇遣はす、若狹之助が心の内を推量せよ、去ながら、義を見てせ
ざるは勇なし、此上の頼と云ふは三世の縁、未來で、未來で忠義
を盡してくれ』

と、跡言さして顔背け、歎かせ給ふ御有様、有難し共嬉し共申
上べき詞もなく、かゝる智仁の名將の御馬先でも死す事か、わ
づかの義理と誤りに、命を捨る不忠不義、何と先非をくやみ泣
御顔見上げ奉れば、殿も見下し御落涙、袖や袴に、雨車軸流て外
へ小柴垣庭に淵なす斗なり。本蔵手を打ち、
『誰そお次の衆、臺子の釜を持來られよ』

はつといらへて持はこべば、本蔵立て釜の湯を柄杓に移し
鉢植にそゝぎかくれば、竹蘭の枯てしばまる釜中の毒湯、

『先刻番左衛門臺子にかゝり、皆殺しにせんと仕込し毒薬立
聞したる本蔵、幸ひ天目奉らざるは右の仕合せ、ハレ御運の強
き我君様』

と、申上れば、若狹之助、猶も忠義を感じける。暫く有て小姓
共、何か様子は白木の臺、一重ぐりに並べしは、三衣袋に袈裟尺
八、餞別とこそしられけり。

『ナニ本蔵、其袈裟尺八は汝へ餞別、一人の娘を思ふ親の身は、
焼野の雉子夜の鶴巢籠の一曲、又此一品は妹三千歳を預け置

たる止宿の一禮心を籠し此一書由良之助が宅へ土産にせよ」と手づから給はる御賜。

「ハ、コハ有難し」と押戴きひらけば高の師直が屋敷の住居水門下部屋侍部屋樹木泉水居間廣間委しく留し繪圖の面

「ハハ、、、、有難しく」と戴き直に懷中し土に喰付三拜九拜有がた涙にくれにける。若狭之助四方を打詠め

「誠や九枝燈火盡て只曉を期すとかや名残は盡ず目出たふ門出の盃せん出立の用意致せ」

「ハ、君には益御機嫌よふ」
「オ、そちも無事でイヤ首尾よふ仕遂せ目出たふく、未來

で逢ふ」

「ハ、ア」

馴し衾の夢をつらぬく寒山寺。

「ム、思ひも寄ぬアノ唱歌は妹三千歳が餘所ながら暇乞と見ゆる。ム幸本藏そちも一曲致せ苦しうない赦す」

「ハ、ハ、ア」

送る素足の氷のくさび朝げの嵐にくれの雪とうかれしことも最早迎ひの駕待斗里の名残の柴小船。

「本藏近ふく」
「ハ、」

「面を上い」

「ハ、」

「我二十五年の春秋をあしたには教訓のきりをはらひ夕べには講説の星を戴き晝夜旦暮のいつくしみ満足に思ふぞよ、是が此世の見納めなるぞハ、ハ、ハ、出立致せ」

「ハ、」

盡ぬ名残と本蔵が涙を隠す編笠の深き恵みに浅き縁是のふ暫しと三千歳姫かけ出給へば若狭之助袖の枝折戸袂のせきおしかこまれて加古川も笠のうちより御顔を見奉れば姫君もいとハ涙にいと竹の未来は一ツ一越断さんやがて黄鐘

鶯鏡は君に仁なり臣に恩あるはおんりつ音ぎよくのさかへさかふる世のためしふでにつたへて加古川の武名を永く残しける。

本藏下屋敷の段註釋

〔三世の縁〕 親子は一世の縁、夫婦な二世の縁、主従は三世の縁と云ふて、主人と家來との間は縁の深いものであるが、哀れむべし若狭之助と本藏主従の縁は浅いと云ふことを、所の浅草といふ名に懸けて、本文には「三世の縁も浅草の」と綴つてある。

〔忍び〕 人の目に立たぬやうにソツと出歩くこと。

〔美盡し善盡し〕 善美を盡すこと。この詞は主に人をもてなす事に用ふ。即ち手の届く限り立派にすること。

〔臺子の釜〕 臺子にのせてある釜。茶ノ湯の式に用ふる棚の如き物。柱四本あつて、上下に板あり、風爐、茶碗、茶入、建水など諸道具を載せて置く。

〔水や〕 茶室の隅で、器を洗ふ所。

〔入側〕 いろがは。座敷と縁側との間の處「裾から手を入側」といふ文句で、こゝではイレガハと讀む。

〔金打〕 刀の刃、または鐔などを打合せること。武士が約束をかへないと云ふ證にする。一旦金打した事は必ず守るのが昔の習ひであつた。

〔後車の禁め〕 前車の覆るを見て後車の戒となすといふ古語から取つたものである。鹽冶判官が短慮であつた爲に身を失ひ家を亡したのを見て、自分も短慮を慎むやうになつた。

〔三衣袋〕 さんえぶくろ。三衣とは僧侶の着る衣、袈裟の類をいふ。三衣袋は坊さんが行脚の時に衣だの佛具だの食物などを入れる物で、頸へ引つ懸けて歩く。俗に頭陀袋といふ。

〔九枝燈火盡きて〕 「——只曉を期すとかや」燭臺の火が暗くなつた、やがて夜が明けるであらふといふ意味。

〔教訓のきりをはらひ〕 學問や世間の事に就て疑がはしい事は一々説明をして呉れたので、ち

やうど霧が晴れたやうに明らかになつた。

〔講説の星を戴き〕 夜はまた學問の講義をして呉れた。

〔一越断きん〕 音律の符。

〔黄鐘鸞鏡〕 これも音律の符で、こゝでは別の意味はないが、琴や尺八に取合せて言葉の文に使つたまでである。

稽古本附義太夫名曲全集

義士忠臣藏

解題

「増補忠臣藏」といふべきで有らふ「義士忠臣藏」では如何にも不熟な命題である。作者も、作の年代も全く分つてゐない。淨瑠璃としては決して佳い作ではないが、單り「本藏下屋敷の段」は今日でも語り物として相當持囃され、芝居でも上場されてゐるが、その大體の筋は「假名手本忠臣藏」の裏と鑑き目とを陳べたやうな物である。

「假名手本」に較べると文章も甚だ拙い。第一、筋の立て方が減茶々々で、締括りがないから讀んだ丈では一向力のない淨瑠璃である。

義士忠臣藏

高ノ師直と桃ノ井若狭之助とは平素から仲が悪い。そこへ救使響應といふ大役を仰せ付つた。何分若輩の事ではあるし、諸事一切師直の引廻しを乞はなければ成らないので、これは何でも鼻薬に限ると思つたから、そこは老巧の加古川、愈々御響應といふ前夜、途に師直を邀してドツシリ賄賂を使つたものだから、そのお蔭で若狭之助は無事に役目を仕遂せる事が出来たけれど、傍の評判は宜しくない。「若狭は誂ひ武士である」と云つて蔭口を叩く者があつた。若狭は不思議に思ひ、だん／＼詮索して見ると、例の贈賄一件が露れたので、腹は立てたものゝ、要するに主人を大切に思へばこそだ、いかに大名でも其れは有難く思つたに違ひない。然し世間體が有るから其儘棄置く譯には行かないので、一先づ閉門を命じて置いた。

本藏は淺草の下屋敷に蟄居してゐる。この下屋敷には主人若狭之助の妹三千歳が預けられてゐる。それは何ういふ譯かといふに、この三千歳と鹽冶判官の弟纏之助とは許嫁同様の仲であつたが、殿中に於て口論の末、判官が刃傷に及んだ折、これを抱止めたのは加古川本藏であ

つた。實は陪臣の身として斯様な席へ出られる筈ではないのだが、何しろ師直が引入れてくれたのだから少しも遠慮する所はない、後來談話の種にもと思つて、式場の光景を覗かして貰つて居たのである。

加古川が抱留めなかつたら判官は本意を達したであらふに、汝、本藏め！と鹽冶一家の憎しみは此方に振懸つて來るわけだ。その鹽冶の弟と三千歳とが此處で手を握るわけには行かない。それに公儀への遠慮もあるからして、矢張この下屋敷へ預ける事になつたのである。

若狭之助の家來に井浪番左衛門といふ男がある。此奴、不都合千萬にも主人の娘に横戀慕をして、あは好くば失敬しようといふ腹なのだが、何分本藏めが邪魔になつて仕様がな。格式は違ふし、腕は利いてるし、何うにも始末が悪い。

ところで、その本藏めは愈々今日お駄佛になると云ふ日がやつて來たので、この馬鹿野郎、跳り上つて喜んでゐる。今宵本藏めをお手討になると云ふ話なのだ。

番左衛門は主人の云付で姫を迎へに来て、自分の腹心の者に云付けて、花川戸の河岸へ船を繋がして置いた。三千歳を渡つて行く支度なのだ。それから茶室へ入つて、釜の中へ毒薬を投り込んだ。かうして置けば何れ若狭之助もごねつて了ふに違ひない。そこで愈々何も彼も自分の手に入るわけだ。うまいぞ〜！

些とも巧いことはない、本藏は其れを見てしまったのだ。

夜になつて若狭之助は駕籠に乗つて来た。やがて本藏は繩にかゝつた儘庭先へ引据へられた。若狭は刀を抜いたと思ふと、番左衛門の首が轉がり落ちた。本藏は其場限り永の暇になつた。

本藏の娘小浪と、由良之助の子息力彌とは云號の間柄であるが、何の途自分が命を捨てねば此の縁は纏まる筈はないから、直ぐに京都へ上つて、力彌の手に掛り、娘を添はしてやらふと云ふ腹なのである。若狭之助は其の引出物にせよと云つて、師直の屋敷の圖面を渡してやつた。本藏は虚無僧の姿になつて江戸を發つた。(をばり)

昭和五年六月六日印刷
昭和五年六月十五日發行

解説
義士忠臣藏

不許
複製

編者 玉井清文堂編輯部

東京市神田區表神保町十番地

發行兼印刷者 玉井清五郎

(行印部刷印堂文清)

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二二八番

玉井清文堂

終

